

## 特定非営利活動法人パクト 平成 24 年度(2012 年度) 事業報告書

自 平成 24(2012)年 10 月 1 日

至 平成 25(2013)年 9 月 30 日

### 1. 事業目的

東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県陸前高田市を中心に、震災による被害を受けた方々に対して、ボランティアの方々とともに、地域密着型の継続した支援事業を行い地域の復興、復興後の地域活性化に寄与することを目的とする

### 2. ボランティア受け入れ状況

個人	作業系の活動 :710 人 漁業支援 :243 人 個人計 :953 人
団体	作業系の活動 :9,648 人 漁業支援 :680 人 子ども支援 :406 人 団体計 :10,743 人(受け入れ団体数計:509 団体)
合計	11,696 人

#### 1) 事業内容(定款上の事業):こども支援事業

##### A) 子どもの居場所づくり活動・『みちくさルーム』運営事業

実施範囲、期間	1. 陸前高田市気仙町:平成 23 年 10 月より継続(●) 2. 陸前高田市広田町:平成 23 年 10 月より継続(●) 3. 陸前高田市矢作町:平成 25 年 2 月より継続(○) 4. 陸前高田市小友町:平成 25 年 5 月より継続(○)
活動資金	日韓共同募金、子どもサポート基金、寄付金
事業目的	震災により多くの遊び場、家族、生活環境を失った子どもたちに対し、気軽に集えるコミュニティスペースを提供し、遊びや学習のサポートを行い、子どもたちがのびのび過ごすことにより、震災によるストレスを軽減させることを目的とする。
受益者	陸前高田市の上記 4 地区に暮らす小学生
事業内容	提携大学と協力し、地域のコミュニティセンター、公民館、仮設住宅集会所等において、子どもの遊び、学習のプログラムを企画し、各地区にて隔週土・日に定期実施した。
協力大学	1. 陸前高田市気仙町:聖心女子大学、神奈川大学

	<p>2. 陸前高田市広田町:上智大学ボランティアサークル、SVN</p> <p>3. 陸前高田市矢作町:岩手大学</p> <p>4. 陸前高田市小友町:東北大学、神戸大学</p>
<p>今年度の具体的な活動と成果</p>	<p>1. 具体的な活動内容</p> <p>学生ボランティアと連携して、遊びや学習のサポートを行った。地域の公民館などのパブリックスペースをお借りし、その中で大人が見守りながら子どもたちがのびのびと遊び・学べるようにしており、遊びの内容はボランティアによる企画をメインとして活動を行った。</p> <p>活動内容は、鬼ごっこや「だるまさんがころんだ」などの日常的な遊びや、七夕にちなんだ工作など、季節に応じた催しに加え、企業の社員ボランティアと協働で行った工作ワークショップなど、多岐に渡る。また、夏休みの学校長期休み期間には、各地区の状況や地域活動に合わせ、子ども向けの夏祭りや、流しそうめん、4日間の継続プログラムなど、特別企画を実施した。</p> <p>その他、気仙地区、広田地区においては、参加児童の保護者を招き、『みちくさルーム』の活動に関する保護者説明会を実施し、それぞれ2名、5名の保護者にご参加いただき、『みちくさルーム』に関するご案内をし、保護者からの意見やアドバイスをいただいた。</p> <p>2. 成果</p> <p>① のべ参加者数:1140名</p> <p>② のべボランティア参加者数:479名</p> <p>③ 参加者の声:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「わたしは、『みちくさルーム』で勉強したり、遊んだりするのが大好きです。わたしは、みなさんとふれあうことが大好きです。わたしにとって、みちくさルームですごす時間は大切なものです。」 (みちくさルームに参加する子どもからの手紙より、原文ママ)</li> <li>・「みちくさルームに参加して、子どもと触れ合うことで、また会いたい、陸前高田に来たいと思った」 (みちくさルームに参加した学生ボランティアのコメント)</li> </ul>
<p>課題と対策</p>	<p>1. 担当スタッフの不足</p> <p>みちくさルームの実施地区が前年度の2カ所から4カ所に増えたのに対し、活動にかかるコーディネーターや事務作業、実施現場の監督を行う専属スタッフは前年度と同じく2名体制となっており、マンパワー不足の状態である。実施現場のスタッフも不足しているため、現場には、上記2名の専属スタッフに加え、派遣スタッフ、ボランティアスタッフ各1名を配置することで、かろうじて事業を運営している状況となっ</p>

	<p>ているため、専属スタッフの増員が望まれる。</p> <p>2. 活動資金の獲得と来年度の継続実施に向けた調整</p> <p>みちくさルームの助成金の一つが、今年度末で事業完了したことに伴い、活動の継続実施のため、急ぎ新たな助成金を獲得することが必要とされている。活動資金を確保した上で、平成 26 年 4 月以降も、協力大学に引き続きご協力いただけるよう交渉していく。</p>
--	---

#### B) 小中学校への学用品支援事業

実施範囲、期間	<p>範囲:陸前高田市内の小中学校 11 校 (平成 25 年 4 月より一部小中学校の合併に伴い、14 校から 11 校に減少)</p> <p>期間:平成 24 年 4 月より継続</p>
活動資金	立教小学校からの寄付金
事業目的	<p>震災後、多くの学用品、備品が流失し、限られた予算の中で、学校教育に必要とされる備品の購入が困難な状況を強いられている陸前高田市内の小中学校に、必要な学用品を寄贈することにより、市内の学校教育環境の改善に寄与し、保護者への経済的な負担を減らす。同時に、必要備品を地元の業者に発注することで、地域産業の復興に寄与する。</p> <p>学用品寄贈のために市内の学校を定期的に訪問することにより、各学校との関係を強化する。</p>
受益者	<p>陸前高田市内の小学校児童:933 名</p> <p>陸前高田市内の中学校生徒:559 名</p> <p>計:1492 名</p> <p>地元の学用品取扱い業者:4 件</p>
事業内容	市内の各小・中学校を定期的に訪問し、必要とされる学用品、学校備品の寄贈を行った。寄贈にあたっては、月ごとに担当学校を振り分け、事前に必要な学用品、学校備品を学校に確認・発注の上、P@CT 子ども支援担当スタッフが各学校に直接お届けに伺った。
今年度の具体的な成果	<p>① 支援先</p> <p>小学校:広田小学校、小友小学校、米崎小学校、高田小学校、気仙小学校、竹駒小学校、矢作小学校、横田小学校</p> <p>中学校:高田東中学校、気仙中学校、横田中学校</p> <p>② 主な寄贈物品</p> <p>コピー用紙、運動会用得点板、収納ラック、デジタルカメラ、事務用品、DVD プレイヤーなど</p>

	<p>③ 地元経済への貢献</p> <p>学校にお届けする学用品、学校備品の購入費、年間約 60 万円分を、地元の業者を通じて消費することにより、地元の経済復興に貢献することができた。</p>
--	--

C) 子ども支援ネットワーク会議運営事業

実施地区、期間	<p>範囲:陸前高田市にて活動する子ども支援団体</p> <p>期間:平成 23 年 11 月から継続</p>
活動資金	なし
事業目的	陸前高田市内で活動する子ども支援団体や、市内の教育機関、保護者が、子どもに関する情報を共有しあい、お互いに協力しあえる体制を作ることを目的とする。
受益者	陸前高田市内の子ども、保護者、教育関係者
事業内容	月 1 回の『子ども支援ネットワーク会議』を運営し、支援活動や市内の子どもに関するニーズの共有を行った。加えて、会議後に議事録を登録団体にメール送付した。
今年度の具体的な成果、および今後の課題	<p>1. 成果</p> <p>① 会議メーリングリスト登録者数:74 名</p> <p>② 会議参加団体:毎回平均 10 団体</p> <p>③ 主な会議参加団体:</p> <p>KnK、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、陸前高田市仮設住宅連絡会、岩手県ユニセフ協会、まちづくりプラットフォーム、子ども図書館ちいさいおうち、教育委員会生涯学習課、教育支援チーム・まつ、児童家庭支援センター・大洋、いわて発達障害サポートセンター・ええ町づくり隊など</p> <p>会議発足当時は、外部からの支援団体の参加が主であり、地元団体や教育関係者の会議参加が課題として挙がっていた。会議を継続実施する中で、子ども支援関係の団体間のみならず、地元の団体や相談機関でも会議の認知度が徐々に上がり、その結果、地元の児童家庭支援機関や、教育委員会職員、発達支援に特化した地元の支援団体などの方々も会議に参加するようになった。加えて、『まちづくりプラットフォーム』と連携し、同団体の運営する、支援連絡調整会議と棲み分けを行うことで、これまで子ども支援ネットワークの存在を知らなかった団体も会議に参加するようになった。</p> <p>その結果、会議で共有される情報のカバー範囲が広がり、さらに専門的な情報を得られる場となった。</p>

	<p>2. 課題</p> <p>P@CT の子ども支援事業の活動範囲が拡大し、さらに団体の規模も大きくなり、業務過多の状況下、子ども支援ネットワーク会議への参加団体は増加傾向にあるため、会議の質を保ちながら、今後も定期的に会議を実施していくことが今後の課題として挙げられる。</p> <p>さらに、地元の教育機関や学童クラブの動向について、支援団体の多くから、情報が欲しいという声が挙がっており、今後地元の教育関係者、学童クラブ関係者などにも声かけを行い、会議への参加を促していく。</p>
--	---

D) 子ども情報誌・『たかたん』の制作、配布事業

実施範囲、期間	<p>範囲: 陸前高田市内の小学校、保育所(園)、子育て支援施設</p> <p>期間: 平成 24 年 11 月より制作開始、平成 25 年 4 月より配布開始</p>
活動資金	寄付金
事業目的	<p>震災後に、子どもの遊び場の数が限られている陸前高田市において、遊び場や子ども向けイベント、子育て支援の情報を集めたフリーペーパーを作成し、子どもや保護者に届けることで、子どもたちが遊び、学ぶ機会と、保護者が子育ての相談をする機会を増やすことを目的とする。</p>
受益者	陸前高田市内の子ども、保護者
事業内容	<p>陸前高田市内の子どもの遊び場情報、イベント情報を収集、編集し、情報誌を制作の上、市内の小学校、保育所(園)、子育て支援施設、子ども支援団体などに配布を行った。</p>
今年度の具体的な成果	<p>① 冊子(1号)の発行: 平成 25 年 4 月、3000 部</p> <p>② A4 版(2号~)の発行: 平成 25 年 6 月、7 月、9 月、各 2500 部</p> <p>③ 主な配布先</p> <p>市内の各小学校(8校)、保育所(4カ所)、保育園(5カ所)、子育て支援施設(あゆっこ、きりりんきつず、ふれあい教室、子育てシップ等)、図書館(陸前高田こども図書館・ちいさいおうち、陸前高田市コミュニティ図書館)、支援団体(KnK、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、陸前高田市仮設住宅連絡会等)、陸前高田市民生部健康推進課、陸前高田市教育委員会生涯学習課など</p>

E) 子ども向けイベント・『つないでフェスティバル』の企画、運営事業

実施地区、実施日	<p>実施地区: 陸前高田市小友町(小友小学校)</p> <p>実施日: 平成 25 年 9 月 14 日</p>
----------	---

活動資金	寄付金
事業目的	地元の子どもたちに、楽しい思い出を作ってもらうことにより、陸前高田への愛着を持ってもらう。また、イベントを通じ、地元・陸前高田の方々と、ボランティアの方々の繋がりを強めることにより、被災地外での「震災の風化」を食い止める。
受益者	陸前高田市の子どもおよび保護者
事業内容	小友小学校のグラウンド、校庭、体育館をお借りし、気球体験や、様々な体験型ワークショップ、地元の飲食店による出店などのイベントを企画、運営した。
協力団体・企業	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 共催:希望の気球プロジェクト～SORAKARA～、特定非営利活動法人 笑顔プロジェクト</li> <li>2. 協力団体、個人:一般社団法人 SAVE TAKATA、特定非営利活動法人 遠野まごころネット、特定非営利活動法人 陸前高田市支援連絡協議会 Aid TAKATA、陸前高田市仮設住宅連絡会、船橋和花さん(個人)、渡邊絢子さん(個人)</li> <li>3. ブース出展:希望の気球プロジェクト～SORAKARA～、特定非営利活動法人 笑顔プロジェクト、本田技研株式会社(HONDA)、シャボン玉(個人)、風船(個人)、八戸学院野辺地西高等学校、認定 NPO 法人 国境なき子どもたち</li> <li>4. ボランティア団体:チーム仁、逗子葉山青年会議所</li> <li>5. 出店者:ふれあい市場、@かたつむり、遠野まごころネット、KAIZAN、たこよし、満福農園、とれたてランド、ワーカーズコープ</li> </ol>
今年度の具体的な成果	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. のべ来場者数:300 人</li> <li>2. 出店者:8 店 イベントの趣旨である、「地元主体であること」を重視し、今回の出店者については、地元の業者からの出展を最優先とした。出店者はいずれもイベントへの参加に対して積極的であり、当日行ったスタッフによる聞き取りでもイベントや、当日の売り上げについては好意的かつ良好なコメントが多かったことから、イベントが地元の業者の営業向上の一助を担うことができたと考える。</li> <li>3. ブース出展者:7 団体 ブース出展に関しては、「子どもが楽しめるものであること」を重視し、その内容に関して、各団体への連絡段階から細かに内容の確認と調整を行った。その結果、イベント当日は、どのブースにも子どもが集まり、参加する子どもが楽しめ、出展する方々も達成感を感じることができたと考える。</li> </ol>

	<p>4. スタンプラリー 今回のイベントでは、会場内を巡るスタンプラリーを開催し、各ブースを回ってスタンプが貯まると、景品がもらえる仕組みを作った。</p> <p>5. ボランティアによる協力 今回イベントにご協力いただいたボランティア団体については、普段からやり取りのある団体を選定し、イベント開始前より緊密に連絡を取り、イベントの趣旨や目的、イベントの流れなどを事前に共有した。それにより、イベント当日もスムーズな協力体制をつくることができ、またボランティア自身も、イベントの趣旨が明確であることから、作業に対するモチベーションも高く、単純作業であっても、活動に対する満足度が高かったように思われる。</p> <p>6. パクトのスタッフ体制 今回のイベントでは、スタッフの配置を、代表理事と団体内の各チーム(子ども支援、サポートステーション、二又復興交流センター+事務局)に分け、それぞれの役割を明確にしてイベントの運営に臨んだ。 またイベント開催にあたっては、週1回の全体会議を行い、会場のレイアウトや当日のスケジュール、想定されるトラブルなどについて綿密に協議を行った。 これにより、当日はそれぞれの配置と業務が明確になり、トランシーバーで各スタッフが緊密に連絡を取りながら、事故なく円滑にイベントを遂行することができた。</p>
--	---

## 2) 地域活性化事業

### F) 二又復興交流センター受託事業

運営期間	平成 25年7月10日より市の受託事業として運営開始
事業目的	陸前高田市内宿泊の利便性を確保し市民との交流を通じ地域の活性化を図ることを目的とする設置目的に基づき運営管理を実施する。 陸前高田市内の雇用の促進
受益者	陸前高田市内を訪れる方々 陸前高田市住民(雇用先)
事業内容	受付業務、施設運営、施設清掃、設備機器維持管理業務
今年度の具体的な成果	陸前高田市住民をパートとして5名、職員として1名雇用 宿泊者数 1289 名

	売上 4,690,200 円
--	----------------

3) 地域活性化事業・中間支援事業

G) 災害復興支援事業

概要と成果	<p>① 側溝の泥出し</p> <p>市内は震災による地盤沈下により、少雨でも冠水し、道路が通行止めになることが多々あるため。ボランティアによる側溝の泥出しを行った。</p> <p>側溝には、思い出の品、貴重品、遺骨などが埋まっていることがあるため、それらの探索・収集も同時に行った。</p> <p>&lt;成果&gt;</p> <p>気仙町全域、高田町内 45 号線付近の側溝の泥出しを行い、これらの道路の冠水を防ぐことができた。また、これまでに、<b>5,297</b> 点以上の思い出の品等を発見し約 <b>1700</b> 点が持主やその家族に届けられた。</p> <p>② 古川沼での行方不明者の搜索・瓦礫撤去</p> <p>陸前高田では、現在でも <b>216</b> 人が行方不明となっているが、これまで古川沼では搜索が行われていなかったことから、市民から搜索を求める声が寄せられていた。そのため、平成 <b>25</b> 年 7 月より、NPO 法人 DSP プロジェクトと協働で、行方不明者搜索のボランティアを開始した。DSP が潜水士による海中搜索を行い、P@CT のボランティアは水中から引き揚げられた瓦礫の分別や、流れ着いた土砂の掘り出しを行った。</p> <p>&lt;成果&gt;</p> <p><b>32</b> 日間、<b>2,135</b> 人による活動の結果、これまでに思い出の品や遺骨など約 <b>35</b> 点発見した。</p> <p>③ 個人・団体からの依頼による活動</p> <p>住民や地元団体からのニーズとして、草刈り、イベントの手伝い、物資の運搬、竹・木材の切り出し等にボランティアを派遣した。</p> <p>&lt;成果&gt;</p> <p>これまでに <b>35</b> 件のニーズにボランティアを派遣し、<b>32</b> 件のニ</p>
-------	---



	ーズが終了した。
--	----------

#### H) 漁業・農業支援事業

<p>概要と成果</p>	<p>○農業支援</p> <p>陸前高田は元来から農業が盛んであるが、震災により多くの田畑や農園が被災。これらの農地を再度使用するためには、土に埋もれた細かいガレキや石の撤去を行う必要があるが、広大な面積を地元住民だけでは対応できないため、継続的にボランティアを派遣した。</p> <p>また、花壇整備や農地における「憩いの場」作りなどにもボランティアを派遣した。</p> <p>&lt;成果&gt;</p> <p>これまでに 21 件のニーズに応え、18 件のニーズが終了した。水田においては、およそ 130 畝の水田が再利用されている。農業支援を通じて、ボランティアと地域住民とが交流を深めることにつながり、リピーターとなったボランティアが現在も継続的に活動を行っている。</p> <p>○漁業支援</p> <p>牡蠣・ワカメ・ホタテなど、三陸の海産物の収穫が徐々に震災前の状態に戻りつつあるものの、元々後継者不足だったことに加え、資材や漁具の流失、家族の喪失、他地域への避難・移住などの理由で多くの漁師が漁業を継続することが難しくなった。地域産業の復活は、復興とも密接に関わっているため、ボランティアが牡蠣養殖やワカメ収穫を手伝った。</p> <p>&lt;成果&gt;</p> <p>これまでに 17 件の漁業関係のニーズに応えた。初めて漁業を行った人も多く、ボランティアから好評であったとともに、漁業関係者からも継続的に依頼を受けるようになった。</p>
<p>課題と対策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天候に左右されやすく、当日のキャンセルもある為、マッチングが難しいこともある。</li> <li>→ 活動が中止になったときに備えて、別の活動を仮にマッチングしておく。</li> <li>・漁業者は教える手間がかかるため、同じ人を希望するが、参加ボランティアは少しでも色々な事を経験したいとの理由から活動を変えたがる。</li> <li>→ 事情を説明し、理解をしてくれた方にのみマッチングする。</li> </ul>

#### D) 新入社員研修と修学旅行の受入れ事業

<p>概要と成果</p>	<p>ボランティアに対しては、活動前や活動中に、オリエンテーションや被災状況などを説明したり、地元住民との交流を深めたりする機会を提供しているが、一部の企業から新入社員にもそういったことを経験させたいという声があったことから、平成 25 年 9 月より新入社員研修としてのボランティア受け入れを開始した。</p> <p>ボランティア活動だけに留まらず、市内の企業関係者や市役所職員と将来のまちづくりについて意見交換を行っている。</p> <p>また、高校の修学旅行生の受入れも開始し、若い世代に震災を伝えるための取組みとして本事業を確立させた。</p> <p>&lt;成果&gt;</p> <p>平成 25 年 1 月から平成 25 年 9 月末までの間で、2998 人の新入社員や学生を受け入れた。</p>
<p>課題と対策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中高生は活動内容に制限があるため、安全な作業を希望している。そのため、ボランティア活動は農作業を中心としているが、時期によっては活動が紹介できないこともある。</li> <li>→ 漁業など農作業以外の活動を検討し、オールシーズンで対応できるようにする。</li> <li>・作業終了後、サポートステーションでの活動報告をせずに現地解散してしまうことが見受けられる。</li> <li>→ 当日の報告が難しい場合は、報告書郵送やメールなどでの事後報告を徹底する。</li> </ul>

#### 3. 2013 年度への課題

- ① 事業が増えるなか、現在の人数で効率よくかつ質を落とさずに事業を進めていくためにも事業の組換えや他団体との連携等を検討。
- ② 中間支援組織として、自治会、他団体と連携をしながら、各地域の市民のニーズ調査を実施し、ボランティアとして活動していただく企業、大学等の団体、また個人のニーズとつなぎ、お互いに良好な関係が築き、今後も関係がつながっていくような支援策を検討。
- ③ P@CT の活動を市民に伝え、市民がニーズを伝えやすくするとともに、会員やボランティア参加の増加をさせる等の広報活動を検討。

以上